

---

# 俺が妹とこうも触れ合うわけがない

鈴原

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺が妹とこども触れ合うわけがない

### 【Nコード】

N7615T

### 【作者名】

鈴原

### 【あらすじ】

学校から帰ると、桐乃はソファの上で雑誌を読んでいた。

夏休みよりは幾分露出度の下がった服装だったが、

膝を抱き寄せるように座っているため下着がちらりと覗いていて…。

「アンタ、暇でしょ。ほら、ここに座って」

床の上ではなく、隣に座るよう勧めてきた妹様だが…!?

## 前編

土曜日、学校から家に帰ると桐乃がリビングのソファで雑誌を読んでいた。

朝、出る時には制服を着ていたから授業があつたはずだが、しつかり着替えを済ませているってことはまつすぐ帰ってきた、ってことか。

ま、寄り道をしなかつたとはいえ、こちらら途中まで後輩たちとのんびり歩いていたからな。

さもありなん、だ。

九月。すでに二学期は始まっていて、そろそろ季節の呼び名が変わってもおかしくない。

暦の上では立秋を過ぎれば残暑と呼ぶわけだが、相変わらず昼間はくそ暑く、まだまだ秋の訪れは遠そうである。

とはいえ、妹の格好は夏休みに比べるといくらか露出度が下がっていて、上はタンクトップだが、下はホットパンツからショートパンツになっていた。

ただ、体育座りのように膝を曲げているせいで、下着がちらりと顔を覗かせていてなんとも目に毒だ。太ももだって、大半が丸出しだしよ。

「おかえり」

まさか兄にパンツを見られているとは露知らず、妹は視線を紙面に固定したまま声をかけてくる。

今こちらを向かれたら、危ないところだった。

凝視していたわけじゃないが、あわてて視線を動かせばその不自然

さにこいつは気づくだろっからな。  
そうなったら最後、どんな罵詈雑言が飛んでくるかわかったもんじやない。

いや、言葉くらいならまだいい。  
持つてる雑誌どころか、へたすりゃ灰皿が使われることだってあり得る話だ。くわばらくわばら。

「おう。ただいま」

当然ながら、俺の返事に動揺はなかった。  
どこかの誰かじゃあるまいし、妹の下着を見て興奮するなんざあるわけがない。

そのところは勘違いしなくてもraithたい。  
だから、淡いピンクのチェックとか、見てないからね。

「ところでさ、アンタ、暇だよな」

冷蔵庫から取り出した麦茶を飲んで一息ついていると、そんな声がかかった。

「帰ってくるなり挨拶だな」

「だって、暇でしょ？」

横柄な態度で、さも当然って言い方をされて、ちょっと前の俺ならカチンときていたんだろうよ。

でもさ、こいつがこっぴど物言いをするときは毛の先ほども悪意はない。

小馬鹿にしてるとかそういうんじゃなく、単にやって欲しいことがあるだけなのだ。

「……ま、否定する要素はねえな」

夏休みに幾度となく机にかじりついてきたおかげで、今のところ試験勉強は少しお釣りが出るくらいである。

足をすくわれるわけにはいかねえから、あまり余裕をかますのはどうかと思うが、

暇かと聞かれて忙しいと突っぱねなくちゃならないだけの理由はなかった。

もはや、あんたらの前でなにをどう言い繕ったところで言い訳にもならねえだろうな。

なんでもかんでも頼みごとを聞くなんざ甘やかしすぎだろ、なんて意見があるかもしれないけど、知ったこっちゃねえぜ。

そうだよ。可愛い妹様の頼みごとを断れるようにはできちゃいないのさ。文句あつか。

「コップ置いたらこっち来て」

「へいへい」

ちよいちよいと指を手前に引く動きで招かれた俺は、ソファのところに戻ると、なんの疑問も持たずに床へと腰を下ろそうとした。すると、妹がまじまじとこちらを見つめてくる。

「どうした？」

カッターシャツにお茶でもこぼしちゃったのか。

それとも昼に食ったカレーうどんの汁が飛んじまったか。

思わず自分の胸元を見下ろし手を当てて確認する。

「ねえ」  
「ん？」

顔を上げると、桐乃はきよとんとした顔を見せていた。

「そうじゃなくて、どうしてそこに座ろうとするワケ？」  
「え」

指摘されて初めて気づく。

なんてことだ。話を聞くときは土下座するのが当たり前になっちゃまっているのか。

「はは、なんでもねえよ」

とはいえ、隣に座ったら怒りだすんじゃないの？  
だったら、最初からここに座るほうがいいような。

「突っ立ってないで早く座ったら？」  
「ああ」

でも、どこに座りゃあいんだ。仲良く横に並べってか？

しかし、のんびりと思考する時間など、うちの妹は与えてくれない。

「ほら、早く座ってよ。話しにくいでしょ」  
「お、っと」

中腰になった瞬間に腕を引っぱられたせいで、よろめいた俺は妹の真横、ソファの背もたれに腕を突くことで転倒を回避する。

自然、至近距離で見つめ合う形になって、そのまま数秒見とれちまった。

薄く、ではあるがきちんと化粧が施された桐乃は、素地の良さもあって美人なのだ。

丸顔だから、美少女、と表現したほうが合っている気はするけどな。

学校じゃ、むちゃくちゃもてるんだらうぜ。

あやせと加奈子とのトリオで、注目を浴びないわけがない。

いくらあいつが睨みを効かせているたって、告白されることだってあるだらうよ。

そうなりゃ、こいつも付き合ってみようか、と思っやつが現れるかもしれない。

「……ちょっと、いつまでそうやってるつもり？」

この声で、ようやく我に返った。

息が触れ合うような近さで実妹をガン見である。

どこかの白い契約魔じゃねえが、わけがわからない。

「悪い」

ほんのりと頬を赤らめている妹からあわてて距離を取る。

すわ面罵タイムかと身構える俺だったが、予想外の反応が返ってきた。

「ふ、ふん。引っぱったのはあたしなんだから、別に謝ることないじゃん。アンタのシスコンは、今に始まったことじゃないんだし」

体中をかきむしりたい衝動に駆られる。

なんで桐乃と話をしていてこんな気分にならなくちゃいけないんだ

ろう。

好きだと言ってくれた可愛い後輩でも幼馴染でもない、血のつながった相手にときどきしちまうんざり、暑気で頭がやられたと思えない。

動揺を悟られまいと立ち上がった俺は、ほんの一瞬だったが、それのような目を向けられて、そのまま動けなくなった。

今日はどうしちまったのか。いつからこいつはお兄ちゃんっ子になったんだ。

俺は髪をぐしゃぐしゃとかき回してからソファに腰を落とし、隣から伝わってきた安堵に気づかない振りをして、前を見たままそっけなく聞く。

「で、用事は？」

「ああ、それね」

桐乃は重々しく応えた後、一転して明るい声でこう言った。

「あたしさあ、ちょっと肩が凝っちゃって。揉んでくれない？」

「はあ？ どうして俺がそんなことをしなくちゃいけないんだ」

こいつは俺のこと、下僕かなにかと勘違いしてるんじゃないかな。

いきなりエロゲー買ってきて、と頼んでくるのもどうかと思うが、これだって大概だ。

「だって、アンタあたしのこと好きなんですよ？ 可愛い妹様が肩凝った、つってんの。だったらすぐにでも肩を揉むべきじゃない？

はい、決まり」

「はい決まり、じゃねえ！」

くそ。返す言葉がねえ。

御鏡のときだけならまだしも、その後にはつきり口にしまったかならな。

でもよ。それを言い出したらおまえだって、一緒じゃねえか。そんなことを考えているせいから、今日の俺は寛大だった。

「なににやけてんの？ キモいんですケド」

心持ち身を引きながら言う妹の態度もほほえましく映る。口ではそんなことを言いながら、いわゆる嫌よ嫌よも好きのうち、ってやつだ。

よし。気分がいいからあれを見せてやるか。

「まあ、これでも見る」

「なによ、これって」

俺は笑顔を維持したまま、胸ポケットに突っこんでいた学生手帳を取り出すと、いぶかしげに眉を寄せる妹に向かって、それを開いてみせた。

「ギャーッ！」

得体の知れないなにかに襲われたら、人はこんな絶叫を上げるものなんだろうか。

驚愕一色で彩られても、こいつの顔は整っている。まったく、美形は得だな。

「し、信じらんない。アンタなに考えてんの？ キモ！ キモ！ キモ！  
キモ！ こないだから黙っていたら度を越した変態ぶり発揮しちゃ  
ってさあ！」

「そうかそうか。おまえに喜んでもらえて俺も嬉しいよ」  
「ぱつと見じゃわかんない分、マシといえばマシだケド、ふざけん  
な！」

なにを隠そう携帯だとすれてはがれちまうことに気づいた俺は、  
代わりの場所を探していた。

電池パックのところに貼ることも考えたけど、結局、手帳の内側、  
学生証の写真の隣にこいつとのツーショットプリクラをくつつける  
ことにしたのだ。

さすがに上から重なるのはどうかと思っただし、そもそも、見せびら  
かそうと思って貼ったわけじゃないからな。

「真性のシスコンね。マジキモい。ありえない。スケベ。痴漢。セ  
クハラ魔王」

桐乃はソファに腕を突き、項垂れた状態で恨めしげに見上げなが  
らぶつぶつ言っている。

なんだよ。もっと派手にやって欲しかったのか？ へっ。困った妹  
だな。

「第一、こんなの妹に報告するなんて、本当にデリカシーのかけら  
もないっつーか。あーあ、キモいっつーならないわ。キモ京介。ううん、  
キモ介！」

「言い直すようなことじゃねえだろ、それ」  
「うっさい！ 黙れ、そして腐れ！ 二回死ね、バカ兄貴！」

冷戦時代からこつち、一年あまりを思えばこの程度の悪態は屁でもねえ。

上機嫌な俺にとつちや、涼風に等しいぜ。

それに、だ。

どういうわけか、暴言を吐きまくっているこいつが嬉しそうに見えるんだよな。

「でもよ、どうして肩なんか凝ってんだ。なにかしたのか？」

「あー、もう。まったく、アンタは……」

困ったような笑みは、苦笑だったのか。照れ隠しのものなのか。妹は、手を組み合わせて頭上に持ち上げると、そのまま背もたれに全体重を預けた。

「ほら、小説」

「あ？ 携帯のか？」

「そ。あの続き、書いたから」

代名詞を耳にただけでピンときた。妹空まごそらである。

ゲームばっかしてると思っていたら、いつの間にか続きを書いてたわけだ。

やけにきつちりとメイクをしてるのは、もしかしたら寝不足によるクマを隠すためなのか。

「担当さんは前々から続きを、って言うってくれてたんだケド、断っていたの。でも、アニメ化したじゃん。そしたら続きを読みたい、って手紙がまた届くようになって」

桐乃は抱え込んだ膝の上に顎を乗せたまま、ぼつぼつと語を継

ぐ。

俺に聞かせるためと言うより、自分の中で整理をつけるための独白に聞こえる。

「それでも、最初は書くつもりなんてなかった。そんな気にはならなかった、かな。だって、あたしの中で物語は完全に終わっていたもん。でも、九分九厘の続編を希望する声に加えて、もう続きなんか書けないだろ、みたいなメッセージを見ちゃったらさ。なんか、火がついちちゃったみたい」

くつくつと喉の奥を震わせる姿は、見慣れた妹様の姿だった。

回想モードは終了とばかりにあぐらをかいて、くるぶしに腕を置く。

「リノを、高坂桐乃を舐めんな、って思っちゃったんだよね。気づいたら、ひたすら携帯叩いてた、ってワケ」

「そっか」

そのときの様子が目に浮かぶようだぜ。口もとには自然と笑みが浮かび、俺は、にひひ、と指の背で鼻の下をこする仕草をみせる桐乃の頭に手を置いていた。

自分でもどうしてそんなことをしたのかはわからない。ただ、考えるより先に体が動いていた。

「がんばったんだな」

「ま、ね」

妹はわずかに見開いていた目を、くすぐったそうに線へと変化させる。

意外にも、俺の手は払われなかった。

「やると決めたからにはとことん、つてのがあたしの信条だから」

よく知ってるよ。勉強も陸上も読者モデルも携帯小説も、アニメもエロゲも友だちづきあいも全部、いつだって全力疾走だもんな。これまで俺の話に耳を傾けてくれてるみんなも、ご存知のはずだ。こいつがどれだけ頑張り屋で、根を詰めすぎる嫌いがあることを、さ。

「あんまし無理するんじゃないぞ」

「アンタの口からそんな言葉が飛び出すなんて、明日は雪でも降るんじゃないの」

楽しそうに笑いやがって、失礼なやつめ。

だが、この分なら平気そうだな。化粧の分を差し引いても、それほど顔色が悪いわけじゃないし、安心してよさそうだ。

「心配しなくても、原稿はもう出来上がっているから。ちょこちょこっと手直し入れる部分はあるかもしれないけど、山場は越えてるし大丈夫」

「そうかい」

わざわざ俺が、手綱を調整する必要はないだろうよ。

むしろ、好きなことに打ち込むことで活き活きしている。

止めに入ったら、噛みつかれちまいそうさ。

と、そのときだった。

「ありがとね、京介」

優しい表情でほほえみかけるといふ不意打ちに、返事に詰まる。

「礼を言われるほどのことはしてねえよ」

「あ、そ」

思いがけず訪れた沈黙は、決して居心地の悪いもんじゃなかった。麻奈美や黒猫と一緒にいるときはまた違う安心感は、血のつながりがそうさせるのか。

少しは俺たちも、一般的な兄妹に近づけたってことなのか。

「ねえ」

小さく首をかしげると、妹は目を反らした。

「肩、揉んでくれるんじゃないの？」

頭の中が真っ白になる。

それって、冗談じゃなかったのかよ。

「え、あ、そうだったな」

かすれ気味の声でしどろもどろに伝える俺を一瞥して、桐乃はすつくと立ち上がる。

「じゃ、行こっか」

「行こっ、ってどこに」

「決まってるじゃない。あたしの部屋」

その台詞をどんな表情で言ったのか、ソファに座ったままの俺に知る術はなかった。

## 前編（後書き）

桐乃SSです。

俺妹8巻を読んで、桐乃×京介を書きたい衝動に駆られて筆を執ったお話です。

続きは、なるべく早くアップしたいと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7615t/>

---

俺が妹とこうも触れ合うわけがない

2011年10月7日20時41分発行